理事長挨拶

特定非営利活動法人
日本免疫学会
理事長 菅村 和夫
宮城県立がんセンター

この度、稲葉カヨ理事長の後を受け2010年10月から2年間の任期で日本免疫学会理事長として本学会の運営を預かることになりましたので、一言ご挨拶申し上げます。

さて、第14回国際免疫学会が、2010年8月22日から5日間にわたり神戸で開催されました。我が国における国際免疫学会の開催は、実に27年ぶりです。幸い前回を大幅に上回る6000名余が世界各国から集い、免疫学の集大成ともいえる最先端の研究成果発表と討論で盛り上がりました。特に、将来の免疫学研究を担う若手研究者にとっては、得難い経験の場となったと確信しています。「25年前の我が国の免疫学は揺籃期にあった。しかし、今や日本の免疫学の成果を抜きにして免疫学の教科書は書けないであろう」という岸本忠三会長のお言葉を借りるまでもなく、近年の我が国の免疫学の発展には目を見張るものがあります。学会員が総力を挙げて取り組んだ国際免疫学会が終了した今、このモチベーションを維持し、さらに活力ある日本免疫学会を築いていかねばなりません。

本学会は発足から40年を経て、現在約5,500名の学会員を有しています。本学会の主たる活動は、学術集会を開催し会員相互の交流を図ることであります。平成22年度は国際免疫学会の開催のほか、通常の学術集会に代わって12月にシンポジウム「免疫の最前線」を開催いたします。一方、2005年の法人化を契機として、本学会は社会貢献活動にも積極的に取り組んでいます。大変好評をいただいている「免疫ふしぎ未来」等の市民公開講座については、今後とも積極的に全国展開していきます。高校生を中心に多くの市民を対象としたわかりやすい講演を行い、免疫学をより身近に感じて頂けるよう、啓蒙と情報発信に努めて参ります。会員の皆様にはこうした趣旨にご賛同いただき、一層のご協力をお願いする次第です。

我が国のライフサイエンス領域において、免疫学は常に先導的な役割を果たしながら進展してきました。しかしながら本学会会員数や学術集会演題数は漸減傾向にあり、決して安閑としていられる状況ではありません。種々の対策が急務となっていますが、我が国の科学行政のあり方等に対し、本学会として積極的に意見を述べることも必要です。継続的な研究者確保とバイタリティーに満ちた研究者を育成するため、今後とも研究をとりまく環境のさらなる改善に努めて参ります。

国際免疫学会の標語「21 世紀における免疫学の潮流:感染症、癌、自己免疫疾患、アレルギーの撲滅を目指して」をご記憶のことと思います。免疫学に与えられた大きな課題は「免疫疾患の克服」にほかなりません。次世代の研究者を惹きつける学問領域として免疫学が光り輝き続けるためには、疾患解明に迫る「生体システム」の理解に向けた統合的学問として発展してゆく必要があると考えます。基礎と臨床の研究者が緊密な交流を保ちながら研究に取り組む「知の拠点」としての場の提供がますます重要であり、本学会がその使命を担っていることは言うまでもありません。

最後になりますが、本学会先輩諸氏が築き挙げてきた素晴らしい伝統と実績を土台として、会員相互の連携を深めながら免疫学研究の飛躍的な進展が図られるよう、本学会の運営に務めて参る所存です。本学会の活動・運営に対しまして、会員の皆様の温かいご協力とご支援をお願い申し上げます。